

シンポジウム「軍記とパロディ」

【趣意文】

文学には、人間以外のもの、生命のないものに人格を与え、物語に登場させることがたびたびある。いわゆる擬人化と称されるものだが、それらの「もの」たちが非現実の合戦を繰り広げる様子が描かれることは、めずらしいことではない。そこでは軍記物語に見られるような現実起きた合戦をそのまま描くことは稀であり、現実起きた合戦のパロディとして、異類物の仮想世界に置き換えて表現されるのである。

しかし、異類などの擬人化されたものたちによる架空の合戦ではあるが、そこに描かれるのは現実世界を架空世界に置き換えた語りであり、物語の背後に当時生きていた人々の生々しい姿が見てとれる。よって、合戦表現によって表象される文化や時代状況を読み解いていくことが必要なのである。事実、源平合戦を経て、日本が未曾有の戦乱に巻き込まれていく十五世紀以降、多数の合戦物が生み出されている。いわば合戦物の登場が、軍記物語に由来する表現世界をめぐましく活発化させていったと言っても過言ではないだろう。そこで本シンポジウムでは、擬人化されるものや異類たちの合戦物語を端緒に、軍記物語から連なる擬合戦、擬軍記を考えることに主眼をおき、合戦表現の展開の様相を考えるきっかけとしたい。

一言に合戦物と言っても、そこに描かれる世界は様々である。『酒呑童子』などの人と異類との戦い、『仏鬼軍』などの神仏と鬼神との戦い、『十二類絵巻』などの動物同士の戦いなど多種多様である。また、扱う資料もお伽草子に限定することなく考えれば、幸若舞曲『百合若』などの異国との合戦物語も含まれてくるだろう。このほか、擬歌合物、論争物、宗論物なども見逃せない。戦さは武力衝突ばかりでなく、詞を用いた戦いもまた合戦の醍醐味である。戦場における詞争いに代表されるが、戦場以外での悪口、論争、落書などの表現にも注目しなければならない。さらに中世文学という枠組みを外せば、さらに扱う範囲が広がっていくはずである。

そこで本シンポジウムでは『十二類絵巻』や『魚太平記』などに代表される、擬人化されたものたちの作品、異類合戦物に焦点を当てることにした。詳細は各パネラーの要旨に譲るが、伊藤慎吾氏には、異類合戦物の文学史上における位置づけを『諸虫太平記』、『むしまひ』などの虫合戦物の作品群と語り物文芸との関係性から明らかにしていただく。伊藤信博氏には、『六条葵上物語』、『月林草』という食物を擬人化した物語から、食物が地獄に墮ちるといった思想的背景を明らかにしていただく。畑有紀氏には、『酒餅論』などに代表される論争物が時代を越えて享受されていく様相を解明することにより、食と文芸との関係性について明らかにしていただく。総じて、異類合戦物を題材に、時代状況や文化、思想との関わりから、軍記物語につながる表現世界との連環を探る一助としたい。

【発表要旨】

虫合戦物の展開

國學院大学非常勤講師 伊藤 慎吾

中世後期の『十二類絵巻』『精進魚類物語』『鴉鷺合戦物語』以来、様々な異類合戦の物語が生み出されてきた。対立する勢力は野菜対魚類、餅対酒、鳥対獣、薬対病を主として、ある程度同様の構図が認められる。それでも時代が下るに従い、京都の織物対関東の織物、座敷道具対台所道具、新銭対古銭など新奇な対立軸も増えていく。そうした中で、虫同士の合戦を描きたいいわゆる虫合戦物は、近世前期から近代初頭に至るまで一貫して異類合戦物の主流をなしていたと思われる。

そこで本発表では、近世前期の『諸虫太平記』『むしまひ』以降の虫合戦物の作品群の流れを追い、その影響関係や物語・語り物の周辺状況を検討し、軍記物語のパロディとしての文学史的意義を考えてみたい。特に問題点としては、『虫合戦物語』諸本の展開や『虫合戦獣鳥の助太刀』と語り物文芸との関係について論じていきたい。『虫合戦物語（蜘蛛夜話）』は比較的流布したと思われる、『虫合戦獣鳥の助太刀（太平記虫合戦）』の成立にも影響を与えている。そして『助太刀』は草双紙として流布する一方で滑稽物の語り物としても東北で口演された。虫合戦物を取り上げることは、物語草子と語り物の関係について考えることにもなるだろう。

『六条葵上物語』と『月林草』

名古屋大学 伊藤 信博

『六条葵上物語』、『月林草』はどちらも食物を擬人化した物語である。しかし、前者は『源氏物語』の六条御息所と葵上の「車争い」をモチーフにしながら、食物が地獄で苦しみ、救いを求める話であり、後者は竹と梅の戦いをその主題としながらも、内容は、地獄に落ちた食物が、死んだ梅を慰める話である。

そこで、描かれる食物の種類、地獄に落ちて、どのように苦しんでいるのか、地獄に落ちた理由などの構成比較などで、この二つの物語の共通項や相違を指摘した上で、その制作意図が全く違っている可能性を探りたい。

また、これらの物語の成立に関わり、食物を列記する「食物尽し」の『常盤の姥』や「名産尽し」の『猫のそうし』などの系統、地獄に落ちた亡霊としての食物を描く『黄精』、『たこ』、『栄螺』、『鯨』などの「夢幻能」の影響下にある狂言との比較により、食物の「成仏」観の成立や思想的背景にどのような理由があったのかを考察する。

江戸後期「酒餅論」作品と流通

名古屋大学大学院国際言語文化研究科・学術研究員 畑 有紀

酒と菓子（餅）の優劣争いである「酒餅論」は、室町時代から明治初期にかけて、仮名草子、黄表紙、滑稽本、錦絵など、さまざまな文芸に用いられたテーマである。類似する食物の優劣争いとして、「酒飯論」、「酒茶論」などが挙げられるが、「酒餅論」ほど長期間、繰り返し取り上げられたテーマはない。また、特に江戸後期の「酒餅論」作品には、酒と菓子を擬人化し、それらの合戦を描く、いわば擬軍記が多い点も特徴的である。

本発表では、「酒餅論」作品のなかでも、特に江戸後期のものを取り上げ、作中に酒や菓子がどのように描かれているかを、産地や店名を始めとする流通の観点から分析する。「酒餅論」作品が制作された当時の流通と、作中の情報を対照することで、食と文芸との関係について、その一端を明らかにしたい。